

資料編

モデル地区検討会議事録

(1) 第1回宮古島市モデル地区検討会 議事録

1. 日 時 平成19年10月31日(水) 14:00~16:10
2. 場 所 宮古島市上野庁舎2階大会議室
3. 出席者 [座長] (財)沖縄観光コンベンションビューロー 常務理事 洲鎌 孝氏
[委員] (社)宮古観光協会 会長 藤村 明憲氏
さるかの会 事務局長 松原 敬子氏
(医)たぶの木 理事長 竹井 太氏
宮古島市老人クラブ連合会 理事・女性委員長 大浦 ヒデ氏
同会会長 新里氏代理
[カザール] (財)東京都高齢者研究・福祉振興財団 客員研究員 平野 貴大氏
[関係機関] 内閣府沖縄総合事務局運輸部企画室 観光振興官 宇崎 勉氏
沖縄県観光商工部産業政策課 課長 平良 敏昭氏
内閣府沖縄総合事務局運輸部企画室 企画第一係長 伊志嶺 友浩氏
[事務局] 宮古島市経済部 部長 宮国 泰男
" 観光商工課 課長 伊良部 和則
" " 観光交流係長 親泊 正人
" " 主任主事 赤嶺 淳幸
(株)ノーザンクロス 代表取締役 山重 明
" 緒川 弘孝
" 宮永 和可子
4. 配布資料 資料1) 調査全体の実施計画
資料2) モデル地区調査の実施計画
資料3) モニターツアー企画案
資料4) 健康長寿観光のあり方について
資料5) 宮古島市モデル地区検討会名簿

5. 内 容

座長挨拶の後、資料1~4に基づき事務局(山重)より説明し、その後、意見交換を行った。

(1) 沖縄と宮古島における観光の現状

- ・観光ニーズが多様化するなか、国民の健康志向の高まりに対応し、ヘルスツーリズムが新しい観光のスタイルとして大きなうねりになりつつある。
- ・沖縄県は周遊観光が中心だが、35%の旅行者が既に一巡したと考えている。県の実態調査によるとリピーター率が7割だが、滞在日数は減っており、滞在・参加・体験型の観光創出が課題である。しかし、一方では、リピーターの中でも訪問回数が増えるほどに滞在日

数が増えている。

- ・沖縄県内で考えると、本島や八重山は周遊型観光に適した資源があるが、宮古島にはほとんどなく、滞在型観光に適した地域だと言える。

(2) 宮古島の特徴とその活用

- ・宮古島の魅力は、海、太陽、温暖な気候、豊かな土から作られる食材である。
- ・宮古島の石灰質を主とする土はカルシウムが豊富であり、潮風はミネラルを運んでくれる。
- ・平坦な地形で山がないことから、島全体に陽光が届くため「ティダ＝太陽の島」と呼ばれている。日光をたくさん浴びた野菜など、それらの宮古の食材は健康長寿の元になっていると考えられている。また、平坦な土地は、高齢者の滞在にも向いている。
- ・温暖な気候は、冬期リゾートとしても有力である。
- ・宮古島ではE3（バイオエタノール混合燃料）実証実験のモデルにもなっており、循環型社会などのエコのイメージと併せて、健康長寿のイメージを膨らませることが期待できる。
- ・宮古島は地下ダムを造り、限られた水を最大限活用して水との共生を果たしている。これを健康長寿と絡めた観光を考えたらよいのではないかと。ただし、島の農業やゴルフ場の農薬の問題には注意する必要がある。
- ・資源がないといわれる宮古島だが、何もなければこそ、心と心の会話があり、最高の財産となるのではないだろうか。

(3) 宮古島の食と健康

- ・沖縄は長寿県であったが、昨今、食生活スタイルの変化に伴って沖縄の伝統的な食が崩壊し、平均寿命が著しく低下した。宮古島を長寿というイメージでアピールするならば、住民も健康長寿でなければならない。
- ・宮古島の食材は豊富だが、今は西洋的な食事の普及で十分に活用されていない。伝統的な食へどのように戻すかが課題である。
- ・宮古の草はほとんどが薬草であるので、散策しながら摘み取ることができる。食材探しの地域資源発掘には、県の地域資源活用プログラム事業なども活用できる。
- ・今回のモニターツアーでは、城辺地区はウォーキングしながら食材集めをしたいと思っているが、薬草は最近では農薬などの汚染があるので、熟知している安全なところでしか採れなくなっている。
- ・薬草は、犬肉と一緒に煮込んだスープなどもあった。肉はヤギや鶏肉で代用できる。
- ・旅行（非日常）で脳を使うことは、日常と比較してより認知症の予防ができるということが事例としてある。
- ・「認知症予防」や「健康」を切り口にして宮古島をアピールする場合には、科学的データや学術的な裏づけが必要ではないだろうか。一度、事件や事故があると長年積み重ねたイメージも一瞬で崩れてしまうため、慎重さも必要である。
- ・経験則で良いと言われることも重視しながら、一方では科学的にきちんとしたデータを基にして健康づくりに貢献できる仕組みづくりが必要。

- ・宮古島には、高齢者も外に出てスポーツ（ゲートボールやグラウンドゴルフ等）をするため、腰の曲がった年寄りが比較的少ない。

(4) 宮古島のおもてなしの心と交流

- ・宮古島は小さい島だが心が寛大である。思いやりの気持ちがあり、おもてなしの心のあることも大きな魅力の一つ。
- ・山形県や福島県の町と行った交流体験では、滞在中に高齢者の血圧が下がるなどの効果が得られた。屋外に閉じ込められている雪深い地域の心身両面のストレスから開放される宮古島滞在は大きな効果が期待できる。
- ・豪雪地帯である新潟県中越地震の被災者の方々を、冬季に宮古島にボランティアで招き、ストレスがかかりがちな心身をリフレッシュして頂くということできれば、島のイメージの向上につながる。
- ・毎年、高知と秩父の養護学校が卒業旅行として宮古島を訪れ、3日間のトライアスロンに挑んでおり、地元でも応援している。このようにハンディを持った方を受け入れることは、宮古島の健康長寿の島としてのイメージを高めることにもなる。
- ・「さるかのかの会」では、去年より修学旅行生の受け入れをしている。城辺地区では、修学旅行生を受け入れ、一緒に農作物を収穫、調理するなどの交流もしている。昨年1校、今年2校、来年12校を予定している。民泊の受け入れ可能な農家は38軒あり、来年度は60軒に増やしたい。・民泊では、大皿を置いた食事を通して、競争力、思いやる心（取っておいてあげようというやさしさ）を養うことができると考えている。
- ・修学旅行の受け入れなどで体験メニューが増えていく中で、観光関係者以外の住民とのふれあいが増えたことは良いが、需要がさらに増えた場合、対応できなくなる可能性がある。住民の本業に迷惑がかからないように両立しながら、双方にメリットがあるようなしくみづくりが必要である。
- ・民泊は、安全確保等の受け入れ体制を細部までしっかりと詰めることが必要であるととともに、サービスの品質管理が必要である。
- ・宿泊施設として、大型ホテルも必要かもしれないが、今後、中高年（旅慣れた人たち等）層は、気の置けない民泊を好む人々が増えると思われる。シニアの人たちが泊れる仕組みを作るとよい。
- ・観光して歩いた場所よりも、宿泊先の人についての方が印象深い。

(5) 宮古島観光と今後のあり方

- ・大企業が大資本を用いて強引に観光開発を行い、ブームが去ったら離れて行くという構図ではなく、長期的な視点を持ち、次世代の子供たちのために、島を破壊しないように配慮し、島のアイデンティティを残すような観光地づくりが必要。
- ・新たに施設を作るのではなく、観光客が地元の人たちに混じって一緒にスポーツなどをすることは、特に環境を壊すことにもならない。
- ・旅行会社が一方的に企画した旅行商品を受け入れるのではなく、地元発の観光商品を提供

できるようにすることが望まれる。そのためには、様々な地域資源や活動のマネージメントなどを行い、地元から発信できるような地域主体の組織が必要になる。

- ・島で見つけた生き方を都会の生活の中でどう活かせるかといったことまで視野に入れた観光を提供していく必要がある。そこから長期滞在、さらに移住につながることも考えられる。
- ・地域の特産物がインターネットで購入できるようになったため、その土地を訪れることが少なくなった。また、他地域に似たものがあるようではその魅力は続かないので、地域固有のものを見つける必要がある。
- ・「都会で手に入らないものがここで手に入る」というだけでは、より近場で同じようなものを探すようになる。
- ・心身ケア、スポーツ、陶芸などの体験プログラムにおいて、体験だけで終わるのではなく、地元の人との交流を行えるよう位置づけ、居場所の提供を行う。
- ・島の人とふれ合う時間を増やすため、例えば3泊4日の旅を5セット、あるいは10年やり続けるような継続性も必要である。
- ・宮古島は、ダイビングやトライアスロンなどのスポーツに加え、最近では、エコツアー、グリーンツーリズム、ブルーツーリズムと様々なメニューが出ている。しかし、今のところ、それらの魅力や資源をバラバラに活かしており、関連付けてまとめた観光振興や受け皿づくりが必要である。
- ・今回のモニターツアーは健常者が対象であるが、将来的には障がい者が参加できるようなケアできる体制を検討したらどうだろうか。そうすることで、宮古島のインセンティブになるだろう。宮古島のイメージアップと他地域の観光との切り口になり得る。

(6) 第2回検討会の日程について

- ・日時：平成19年12月12日(水)14:00~16:00となった。

以上

(2) 第 2 回宮古島市モデル地区検討会 議事録

- 1 . 日 時 平成 19 年 12 月 12 日 (水) 14 : 00 ~ 16 : 00
- 2 . 場 所 宮古島市上野庁舎 2 階大会議室
- 3 . 出 席 者 [座 長] (財)沖縄観光コンベンションビューロー 常務理事 洲鎌 孝氏
[委 員] (社)宮古観光協会 会長 藤村 明憲氏
さるかの会 事務局長 松原 敬子氏
(医)たぶの木 理事長 竹井 太氏
宮古島市老人クラブ連合会 理事・女性委員長 大浦 ヒデ氏
[カザール] (財)東京都高齢者研究・福祉振興財団 客員研究員 平野 貴大氏
日本学術振興会特別研究員 / 国立民族博物館 福井 栄二郎氏
[関係機関] 内閣府沖縄総合事務局運輸部企画室 企画室長 村上 強志氏
沖縄県宮古支庁総務・観光振興課 主査 小禄 雅夫氏
沖縄県宮古支庁総務・観光振興課 内田 菜美子氏
内閣府沖縄総合事務局運輸部企画室 企画第一係長 伊志嶺 友浩氏
[事務局] 宮古島市経済部 部長 宮国 泰男
" 観光商工課 課長 伊良部 和則
" " 観光交流係長 親泊 正人
" " 主任主事 赤嶺 淳幸
(株)ノーザンクロス 代表取締役 山重 明
" 緒川 弘孝
" 宮永 和可子
- 4 . 議 事 (1)第 1 回地区検討会の確認
(2)第 1 回調査検討委員会
(3)都市住民向けネットアンケート調査結果について (親委員会) の報告
(4)モニターツアーの実施計画について
(5)その他 (第 3 回検討会の日程について等)
- 5 . 配布資料 資料 1) 第 1 回地区検討会会議録
資料 2) 第 1 回調査検討委員会議事次第・委員名簿
資料 3) モデル地区の取組状況
資料 4) 健康長寿観光のあり方について
資料 5) 都市住民向けネットアンケート調査結果 (中間報告)
資料 6-1) モニターツアー実施計画
資料 6-2) モニターツアー申込み書
資料 7) 宮古島市モデル地区検討会名簿

6. 内 容

座長挨拶の後、資料 1～6 に基づき事務局(山重)より説明し、その後、意見交換を行った。

(1)食と健康

- ・ 運動と食物の関係で、生態機能が改善される、血圧が下がるといった結果が、まだ公表できないが、事例としてあることは事実であるから、良い事例を集めるとよいのではないか。
- ・ 宮古で栽培された野菜を中心とした食生活を送ったところ、大変体調が良くなった。食事は健康にとってとても大切だと実感した。
- ・ 宮古の健康食については、観光客向けというより、むしろ地元の人たちが健康を意識して摂らなければならない。性急にはことが運ばないが、そのような取り組みをモデル的に行っていくことは可能ではないか。
- ・ 諸外国の事例であるが、公共交通が発達していない土地に生活する人はメタボリックが多いとの統計がある。モータリゼーションの影響は大きい。これは、車で移動することが多いためといわれている。沖縄県は、階段の上り下りが少ないためか、メタボリックの率ではワーストワンとなった。現在のライフスタイルの見直しが必要である。
- ・ 自分の体は自分で守り作るというかつては当たり前であったことが、現在では忘れられ、医者に診てもらえばよいというような他力的な生活が当たり前となっている。沖縄は華やかなものを求めすぎたために、独自の生活スタイルから逸脱してしまい、急激に健康から遠のいた。自分の体を作り直すことから始めていけば、自分たちが健康になるだけでなく、地域の財産として正しい観光メニューともなるのではないだろうか。

(2)おじい、おばあを前面に出した観光(ガイド)

- ・ いまの宮古の若い人の生活は健康的な生活ではないので、従来の伝統的な健康長寿生活を体現するおじい、おばあを前面に出した交流を行うことで、宮古の「健康長寿」を実感してもらえる。日常生活スタイルの違いによって寿命に差が出てくることもわかる。実際にいまも健康長寿に良い伝統的な生活をしている人がいるということが参加者にとって最大の参考になる。
- ・ おばあが、地元のエピソードを話しながら周遊するツアーガイドをしたり、伝統料理を教えるのがよいのではないか。観光協会と連携して、おじい、おばあに宮古の文化、歴史、食べ物などの専門家になってもらうとよい。
- ・ そのように、おじい、おばあが外で活動できる機会が増えれば、家に引きこもるのを防止できる。急速に高齢化が進んでいる宮古島でこのような仕組みを継続的に作ることができれば、全国的なモデルにもなるのではないか。

(3) ツアー全体について

- ・ ツアーを行うことによって、まずは地域住民が自分たちの資源、財産に気がつき、健康に対する意識が持てるのではないだろうか。
- ・ 参加者には、地元の食や地元の人との関わりから健康長寿の「原点」を知ってもらい、それらを通して宮古の健康長寿の生活を学んでもらう。また、少しでも自分の生活に取り入れてもらおう。
- ・ 前回まで仮称としていた「認知症予防ツアー」の「認知症」という表現については、旅行のプランを自分で立てることが認知症の予防に効果があるといわれているが、事例としてはあるものの、エビデンス（証明）は現在のところ追跡中であり、公表できる段階ではないことから、「認知症」を「脳の活性化」という表現へ変更した。
- ・ 個人の自由旅行では、当然旅行者が自分自身で旅程を考えて計画し、実行する。そういう自由旅行と今回のような自ら旅を企画するツアーで脳活性化をするのとどこが違うのか、その区別をどのようにつけPRするのも課題となる。
- ・ 個人で旅程を考えて実行する自由旅行の経験者と未経験者では条件が大きく異なる。今回初めて旅程を考えた参加者でないと脳が活性化されたかどうかかわからないのではないかな。
- ・ 本調査では、自宅に戻ってからの追跡調査はしないが、ツアー最終日にはアンケート調査を行う。

(4) ツアープログラムについて

【地元の人との交流】

- ・ 地元の人との交流ということから、おじい、おばあの話聞くプログラムを考えている。また、おじい、おばあの智恵無しには健康長寿はないと考えており、地元の私たちも学びたい。
- ・ 最近は同居することが少なくなっているため、おばあも話をする機会が少なくなっている。お昼は隣近所で話したり、聞いたりしていたことが健康に繋がっている。
- ・ 昔、助け合いながら生活をしたときの話をすると、おじいやおばあ自身がとても喜んで話をする。語り、話を聞くとストレスが無くなることもあり、ストレスが無くなると免疫力が高まり健康になる。

【早朝の砂浜ウォーキングについて】

- ・ ウォーキングのタイミングについては、食前、食後、30分以上経過していればよい。
- ・ 散歩であるから、インストラクターはいない。強制があるのは望ましくない。
- ・ 日ごろから朝早く起きる習慣の無い人にとっては、早朝から散歩するのは辛いのではないだろうか。反って、健康に良くないのではないだろうか。
- ・ きちんと内容や効果を説明した上で行わなければならない。1度ですぐには健康にはな

- らないので、繰り返し宮古に訪れてもらうようにピーアールする。
- ・元の生活に戻って継続できるものでないとならない。単に運動を行うのではなく、ピフオーアフターまで考慮して提供しないと良いプログラムとは言えない。
 - ・一つの生活提言として持ち帰ってもらい、帰宅後も続けてもらうことが重要ではないか。
 - ・ウォーキング前には、ウォーキングの心得を説明し、膝や足首を中心に準備体操、水分補給をし、ウォーキング後もクールダウンをして終わることが大切。
 - ・都会では味わえない風景なのだから、自然の流れに乗せて（任せて）、形式ばらずに歩くのもよいのではないか。

(5) ツアーの募集について

- ・ツアーの募集先として、東京圏が中心に行く。現在のところ、60歳から90歳台まで応募がきている。定員は20名だが、現在は既に10名の申込用紙が届いており、口頭では5~6名ほど参加したいと言っている人がおり、関係者等を含めると事実上の定員となっている。

(6) 宮古における観光のこれから

- ・地域が持つすべての要素により宮古が出来ている。調査研究のテーマである長寿と健康は、宮古の様々なセクションの参画を得てしか作れない。地域に住む人がひとつの方向性を持ち、地域が主体的な力を持てば動いていく。
- ・今回は健康長寿という特定のテーマで行うが、宮古がこれから着地型商品でそのような大きなベクトルを持つことが、地域づくりの力となる。
- ・こうした方向で宮古の観光を定着させるには、リードする行政の役目も重要であるし、プレイヤー（民間）の積極的な参加も必要である。
- ・旅をして楽しただけでも、「楽しい」ということで免疫力は高まる。加えて、健康プログラムを通して確実に健康に効果が出るのが証明されれば、それに基づいて旅を仕掛けることが大きな柱になる。
- ・島に入るときには入島憲章など地元が重んじている事柄を学んだ上で遊びにきてもらう。それは地域の文化や環境を守ることにもつながる。
- ・宮古島では、バイオエタノールや風力発電など次世代エネルギーの開発にももの開発にも力を入れている。例えば、現在は島内に散在しているそうした施設を一ヶ所に集めるなどしつつ、健康長寿と結び付けてイメージづけやPRに活かすこともできるのではないか。
- ・水を使った健康法と血圧との関係などが実際に研究されており、地元の人は海水でウォーキングをしている。

(7) 専門機関との連携について

- ・ 今回のモニターツアーは、広島では広島大学、新潟では東洋大学の協力も得ながら行われている。これからは、このような専門機関や地域に密着している団体などとの連携が大きな力となるかもしれない。
- ・ 大学の先生だからと安心せずに、本物を残せるようにきちんと見極めなければならない。
- ・ 平成 17 年度、琉球大学に新しい科学的な観光のあり方を研究する観光科学科が設立され、来年 4 月にはその観光科学科も含めた観光産業科学部が創設される。場合によってはその琉球大学と連携して進めていくのもいいのかもしれない。
- ・ そのように、きちんとした学術機関との連携をとるなど、地域が各種専門機関・組織との連携を深めて観光消費につなげることが今後の課題である。

(8) その他

- ・ 毎日風呂に入るなど清潔にしている人より、土いじりなど多少清潔でない環境に触れている人の方が、細菌が小さな傷などから体内に入るなどして免疫が刺激され、免疫力が高いことがわかってきた。
- ・ 「健康長寿」を目的とするならば、免疫力は切り離せない。全国のモニターツアーにおいて、地域ごとに免疫力(採血、アンケートなどで基本的なことがわかる)を測り比べるのもよいのではないだろうか。
- ・ 暖かい時期は寒いところへ行くなど宮古島だけに取り込もうとせずに、各地を巡りながら健康長寿になるというような全国的な視野で健康長寿のためのプログラムを組むことが大切であり、他地域との連携も図るべきである。
- ・ 「聴覚障がい者の会」は、聴覚に障がいを持つ人にガイドとしての訓練をしてもらい、聴覚障がい者同士で観光名所を巡る。障がい者の方々のアイデンティティも高まる。バリアフリー観光として最高の取り組みではないだろうか。

(9) 次回検討会について

- ・ 第 3 回検討会は、2 月 13 日(水) 14:00~16:00 に開催することとなった。

以上

(3) 第3回宮古島市モデル地区検討会 議事録

1. 日 時 平成20年2月13日(水) 14時00～16時10分
2. 場 所 宮古島市本庁舎(平良庁舎)
宮古島市平良字西里186番地 TEL0980-72-3751
3. 出席者 [座長] (財)沖縄観光コンベンションビューロー 常務理事 洲鎌 孝氏
[委員] (社)宮古観光協会 事務局長 渡久山 明氏
さるかの会 事務局長 松原 敬子氏
宮古島市老人クラブ連合会 理事・女性委員長 大浦 ヒデ氏
[カザハ] (財)東京都高齢者研究・福祉振興財団 客員研究員 平野 貴大氏
日本学術振興会特別研究員/国立民族博物館 福井 栄二郎氏
[関係機関] 国土交通省総合政策局観光資源課 文化観光推進官 高橋 智一氏
内閣府沖縄総合事務局運輸部企画室 企画室長 村上 強志氏
沖縄県観光商工部産業政策課 課長 平良 敏昭氏
内閣府沖縄総合事務局運輸部企画室 企画第一係長 伊志嶺 友浩氏
[事務局] 宮古島市経済部 部長 宮国 泰男
" 観光商工課 課長 伊良部 和則
" " 観光交流係長 親泊 正人
" " 主任主事 赤嶺 淳幸
(株)ノーザンクロス 代表取締役 山重 明
" 緒川 弘孝
" 宮永 和可子
4. 議 事 (1) 報告事項
第2回検討会(H19.12.12)の議事内容の確認(資料1)
第2回調査検討委員会(H20.1.25)の報告(資料2)
健康長寿観光フォーラム(仮称)の開催について(資料3)
モデル地区調査報告の構成案について(資料4)
(2) モニターツアー(H20.1.20～23)の報告
モニターツアーの実施内容について(資料5)
モニターアンケートの集計結果について(資料6)
(3) 健康長寿観光の展開方策について
健康長寿観光のあり方と展開方策について(資料7)
宮古島市における健康長寿観光の展開方策について(資料8)
5. 配布資料 資料1) 第2回モデル地区検討会議事録
資料2) 第2回調査検討委員会議事次第
資料3) 健康長寿観光フォーラム(仮称)の開催案

- 資料4) モデル地区調査報告の構成案
- 資料5) モニターツアーの実施内容
- 資料6) モニターアンケートの集計結果
- 資料7) 健康長寿観光のあり方と展開方策について
- 資料8) 宮古島市における健康長寿観光の展開方策について
- 資料9) 宮古島市モデル地区検討会・出席者名簿

6. 内 容

座長挨拶の後、資料1～8に基づき事務局より説明し、その後、意見交換を行った。

(1) モニターツアーでの課題

- ・ モニターツアーの参加者からは、宮古島の健康的な食事、その詳しい解説、美しい自然、島の人の人情というものが大変高い評価を受けた。
- ・ ただし、農業体験のメニューが変更となってしまったこと、交流会はオトリーを廻し過ぎてしまい、参加者には喜んでもらえたものの閉会時間が遅くなってしまったこと、また、天候がよくなかったため、予定していたプログラム（遺跡めぐりなど野外メニュー）が中途半端な形となってしまったことなど反省点としてあげられる。
- ・ これは、主として旅行会社と受け入れ側との間の連絡・調整不足によるものが大きい。今回のツアーでは課題の抽出ができ、大変勉強になったので、これからは連携を取りながら進めたい。
- ・ 民宿をはじめ、地元の方々と交流する機会が多く設けられていたため、参加者からは地元の人への暖かさを感じたという意見が多く、また来たいと言う人も多かった。
- ・ ただし、宮古島までの飛行機が、往路の羽田は早朝発、復路は深夜着という点が、特に高齢者への大きなネックになっている。こうした点は改善されるとよい。

(2) 宮古島の資源

1) 地域の健康長寿

- ・ おじい・おばあは宮古島の重要な資源と言えるが、現在のおじい・おばあのように、いま50代、60代の人たちがおじい・おばあになる20年後、本当に健康長寿でいられるのかどうかはわからない。持続的に考えるならば、長期的にも地域住民が健康長寿である必要があるのではないか。
- ・ 週間ダイヤモンド(07.10.13)の記事によると、沖縄県男性が長寿県首位から脱落した原因として本土より早くアメリカンナイズドされた食生活が挙げられていた。「ある意味、本土を先取りしている」というように逆手に取って、沖縄県がいち早く昔の健康長寿の生活に戻るような取り組みをしていけばよい。
- ・ 長野県は現在、男性の長寿日本一であるが、昔は短命で土地の土壌もやせていた。

長野県は沖縄県の長寿を真似るべく保健関係者等を派遣して勉強し、30年以上にわたって食事改善運動を行うなどして日本一の長寿県となった。現在では、逆に沖縄県が長野県に学ぼうとしている。長野県では、高齢者の就業率が高いことも健康長寿の原因かもしれない。そうした点にも学ぶべきではないか。

2) 自然

- ・ モニターツアーのアンケート結果で、宮古島の「豊かな自然環境」が好評だった。これは海が中心ではあるが、それだけでなく、ゆったりとした気候・風土、くつろげて、気持ちや身体がほぐれる全体的な環境を指していると思われる。
- ・ 宮古島の豊かな自然環境は、地元に住んでいると日常すぎて気づかなかったり、わからなかつたりする。ハイビスカスのような外からの旅行者が喜ぶような花を、盛りの時期に全部切るようなことを平気でする。外からの視点で観光資源は何かということを見直すことが大切である。

3) 土壌

- ・ 宮古島の健康的な食が好評だったとのことだが、弱アルカリ性の土壌であることが大いに関係していると考えられている。長寿と土壌の関係に明確なエビデンスがあるわけではないが、もしかしたら関係があるかもしれない。
- ・ 東京農大の野菜の抗酸化力の研究で、全国6箇所でゴーヤの抗酸化力を調査比較したところ、宮古島のゴーヤが最も抗酸化力が高い（通常の2～3倍）ことがわかった。
- ・ 土壌は、宮古島にとって健康長寿の資源になるかもしれない。農業分野からも、この点をアピールしたり、生産面での指導をしてもよいと思う。
- ・ 宮古島の食をアピールをするのであれば、こうした“弱アルカリ性の土壌”“宮古島産野菜の抗酸化力”を推進・展開方策のどこかで利用できることよい。
- ・ 観光プログラムなどでも、例えば3日間、宮古島の健康に良いといわれている食事、食材を具体的に提供するテーマを絞ったものがあってもよい。

4) 健康食・郷土料理

- ・ 以前、沖縄の食についての調査を実施したところ、年令が高くなるほど、不評の声が多かった。しかし、今回のモニターツアーでは、食について高い評価を得た。それは、中味汁、パパイヤ・小豆の煮込み、ゴーヤチャンプルー、ローゼルやゴーヤのゼリーなど宮古島ならではの食、採り立ての食材にこだわったことが大きいと思われる。
- ・ また、食材を丁寧に説明したり、一緒に調理するなどしたことも大きな要因と考えられる。料理は、味そのものだけではなく、その料理（食材）のストーリーを知ることによって評価が高まるのではないか。実際のアンケート結果でも、それを裏付けている。

- ・ 以前の沖縄県の調査で結果がよくなかった原因は、もしかしたら料理を提供する側の対応が悪かったためとも考えられる。

5) 温泉浴・タラソテラピー

- ・ 本調査に係る都市住民を対象としたインターネットアンケートにおいて、「参加したい健康長寿観光プログラム」という設問に対し、温泉浴が最も多い結果が出ている。宮古島では、もう一ヶ所、温泉を掘削中であり、宮古島にも温泉があることをPRしたほうがよい。
- ・ 久米島ではタラソテラピーを提供する施設もある。宮古島でも久米島のプログラムに学んで取り入れてはどうか。

6) その他

- ・ 宮古島では、エコアイランド構想、バイオマスの研究、E3燃料、風力発電、太陽光発電など、さまざまな環境に関する取り組みも行っているため、健康長寿のイメージに取り込めないだろうか。

(3) 今後の取組み

1) 地元の連携体制

- ・ 今回のモニターツアーの受け入れを行った「さるかの会」が活動する城辺地区以外の既存の地元のグリーンツーリズム活動としては、下地地区に二つの組織がある。その他に個人ベースで動きがあり、狩俣地区、島尻地区などでも新たに組織を立ち上げたいという話もある。しかし、全般的にはあまり活発な活動がされてない。
- ・ 個人ベースだけでは活動に限界がある。やはり今後は、各地区での組織化とそれによる活動活発化が必要である。
- ・ さらにこうした地区の組織が連携してクラスターをつくり、統合した受け皿組織となるものが必要である。
- ・ そのように、いくつかの芽を見出し、つないで組織化するとユニークな受け入れ体制ができる。既に今回の推進方策の提案により、全体の方向や形が明確に見えたので、次のステップとして、ATAづくりを宮古島市や地元旅行会社が連携して、できるけ早く進めるべきである。特に観光協会は積極的に先導してもらいたい。
- ・ このような組織は受け皿である地元の熱意なしには実現しない。また、動き始めたら、民間主体で活動し、経済ベースにものせていく必要があり、またそうでないと長続きしない。しかし、初期段階では、行政のイニシアティブが必要であり、立ち上げを全面的に支援する必要がある。

2) 宮古島市の庁内での連携体制づくり

- ・ 宮古島市では、早急に役所内の庁内連絡会議を設置してもらいたい。既存の類似し

た連絡組織はあるようだが、具体的に動いていないということであれば、積極的に体制づくりに動いてもらいたい。東京での最終の全体委員会でも、この仕組みを是非、発表したい。

- ・ 宮古島市では旧市町村ごとの分庁方式を取っている。これを活かして、行政側でも各地区に担当者を設置して地域と連携して進めてもらいたい。
- ・ グリーンツーリズム、ブルーツーリズム、エコツーリズム、環境教育などは、通常は農水、環境、教育など他の担当部署で受け持つことが多いが、宮古島市では観光商工課に期待されている。しかし、人員面、財政面などで十分に対応できそうにない。そうした点でも、庁内の連携・協力が強く望まれる。

3) ボランティアガイド

- ・ 80歳以上でも宮古島のおじい、おばあは元気であるが、そのことはあまり知られていない（表に出されていない）。また、おじい、おばあは自分で話をしたが。そのような年配者が普段からボランティアガイドに取り組んでいれば、ニーズがあったときにすぐ対応できる。
- ・ やる気がある高齢者に、ボランティアガイドへ登録してもらい、データベースをつくるとよい。そして、ガイドをしてもらうことにより、高齢者も元気になり、彼らから元気をもらう。
- ・ 実際、市では観光ガイド（観光コンシェルジュ）の養成をしており、健康長寿観光ともつなげていける。

4) インターネット環境

- ・ 今は、情報収集のほとんどをインターネットから行うような時代になった。旅行雑誌より情報量が上回るようになったため、旅行雑誌をまったく見ない人まで増えている。国内・海外問わず、旅行の手配をすべてインターネットで予約することさえ可能である。
- ・ そのような状況では、インターネット上にはないものは選択肢にはなり得なくなっている。地域でのPC環境の整備が重要かつ急務であり、ネットでの魅力づくりは重要である。
- ・ 今回のモニターツアー参加者はほとんどが高齢者であったが、91才の参加者をはじめインターネットに精通している人が多く、帰宅後3日間で詳細な旅行記のホームページを作成した参加者もいた。また、今後、民宿の予約をネットで行いたいという要望も寄せられた。
- ・ 現在パソコンを使って仕事をしている層が今後高齢になるが、退職したからといってパソコンスキルがなくなるわけではなく、むしろインターネットを旅行をはじめ様々な活用するようになる。そのようなことを考えると、やはりインターネット環境整備は重要である。

5) 交流

- ・ 宮古島のあたたかさである「交流」も健康につながるのではないかと。ツアーは年配の方が多かったため、地元の年配者との交流を持てるように仕掛けをしたほうがよかったと思った。
- ・ 交流は、一方的に地域側がもてなすばかりでなく、訪問者側も音楽やパソコンなどを教えたり、ゴミ拾いをしたりして、地域に役立つことができるものもあるよという声が、モニターツアーの参加者から聞かれた。
- ・ 参加者と地元のひとが日常生活の中で行っていること（スポーツなど）を通して交流すると負担がなく長続きすると思う。
- ・ 学生の交流試合や合宿などはどうだろうか。ただし、宮古島でやる意味（理由）をきちんと考え付加価値を付けていくことが課題である。
- ・ モニターツアーのアンケートで「地域に親しい友人や仲間をつくりたい」という回答も多かった。今回のツアーの交流の成果のひとつといえる。現代の都会の人たちは、通常の旅行にある受け入れ側とお客さんの決まりきったやり取りではなく、友人や仲間のような普段着の感覚での交流を持ちたいと考えている。山古志村のモニターツアーでも同様の反応もあった。そうしたニーズに応えるためには、さるかの会のようなグリーンツーリズムや民泊、伝統文化を通じた交流など、何度も訪れて交流できるような仕組みが求められる。
- ・ 今回モニターツアーに参加したメロウ倶楽部の人たちを集めて、宮古島で健康をテーマとした会議をしてもらったらどうだろうか。健康ツアーと組んでやると面白いのではないかと。

以上

健康長寿観光フォーラムでのモデル地区提言

(1) 健康長寿観光フォーラムの実施概要

1) 日時 : 平成 20 年 3 月 10 日 (月) 13:30 ~ 17:00

2) 会場 : 虎ノ門パストラルホテル新館 5F「ミモザ」(東京都港区虎ノ門 4-1-1)

3) 参加者 : 自治体、観光関係者、報道等、約 80 名

4) 次第 : 主催者挨拶

基調講演「健康長寿観光が日本の未来を拓く」

石森 秀三氏 (北海道大学観光学高等研究センター長・教授) 基調講演

委員会報告「健康休暇運動の提言」

佐藤 博康氏 (調査検討委員会委員長・松本大学経営学部観光ホスピタリティ学科長・教授)

モデル地区報告 (各モデル地区座長より)

北海道上土幌町

西村 孝司氏 (北海道大学遺伝子病制御研究所・教授)

新潟県長岡市

石黒 義久氏 (長岡市総合政策アドバイザー)

長野県木島平村

伊藤 建介氏 (山手出版社代表取締役社長)

広島県三原市

大塚 彰氏 (県立広島大学三原地域連携センター長・保健福祉学部教授)

沖縄県宮古島市

洲鎌 孝氏 (財団法人沖縄観光コンベンションビューロー常務理事)

総括コメント : 石森 秀三氏、佐藤 博康氏



(2) モデル地区提言 (抄録)

モデル地区検討会座長：洲鎌 孝 (財団法人沖縄観光コンベンションビューロー 常務理事)

新たな観光創造の取り組み



トライアスロン競技を通じた交流(スポーツアイランド構想)、伝統行事を活かした交流(年に1度の島を挙げてのイベント)、グリーンツーリズム(宮古島の土壌はアルカリ性で非常に耕作力が強い。この農業を体験しながら民泊する) 等に取り組んでいる。

豊かな健康文化・資源

宮古島の平均気温は 23 ~ 24 度で、寒い2月でも 18 度。年間を通して非常に暖かい癒しの自然環境にある。また、健康に良い食材、伝統食も豊富で、健康長寿なおじいおばあ の知恵も貴重な資源である。

モニターツアー

参加者へのアンケート調査では参加者 15 名のうち 12 名が「地元の人々のもてなし」を「宮古島の魅力」として選んだ。

健康休暇運動の展開方針

「おじいおばあに学ぶ健康の島・宮古島」をテーマに、「健康長寿な島づくり」、「もてなしの島づくり」、「発信する島づくり」、「長続きする島づくり」を基本姿勢とした取り組みを進めていきたい。

健康休暇村・宮古島の運営体制

宮古島健康休暇エージェンシー (ATA) を中心とした推進体制を組めないかと考えている。また、旧市町村で各 10 の民泊施設を整備して、それぞれの施設の連携を図っていき たいと思う。

新聞報道など



付託された議案の審議を行った市議会経済工務委員会＝5日、宮古島市役所平良庁舎

宮古島市

健康長寿のモデル地区に

地域滞在型観光の推進へ

宮古島市は、健康長寿社会観光モデル事業を今年度で実施する。健康長寿社会の実現に向けた地域滞在型観光の推進方策に関する国土交通省と厚生労働省の委託事業で、宮古島市が全国5カ所の一つに選ばれた。今後、宮古島市をモデル地区とした検討会を立ち上げ、受け皿づくりを整備するとともに健康長寿をテーマとしたモニターツアーを実施する方針。

国から委託、全国で5カ所

五月に行われた市議会九月定例会の経済工務委員会(池間豊委員長)で、担当する市経済部観光商工課が事業内容などを説明した。

それによれば、都市住民の健康長寿のライフスタイルに対する志向やニーズをより行動などを

調査分析し、地域の多様な観光資源を活用した新しい観光プログラムと健康長寿プログラムの検討会を年内に立ち上げる。検討会は、地元から観光や健康、医療分野の専門家ほか、国交省や厚労省、県などで構成。十月中旬から計三回にわたり▽調査の目的や内容▽モニターツアーの実施計画▽宮古島市における健康長寿観光の資源、特性、取り組み▽宮古島市における健康長寿観光の展開方向とプログラム▽今後の推進方策や運営手法などをテーマに「健康長寿観光」に関する地域づくりの方策を探る。モニターツアーは来年一月を予定。東京や大阪、名古屋方面から二十人程度を募集し、三泊四日、四泊五日の地域滞在型観光を実施する計画。市観光商工課は説明で、「始まったばかりの事業で具体的な施策を提案できない」としたが、委員からは「宮古観光の振興に大いに貢献できるのではないかと期待した。市は、同事業に八百八十万円の補正予算を計上。九月定例会で承認を求めている。

健康長寿を観光に

検討会 発足 宮古での可能性探る

健康長寿社会に対応した地域滞在型観光の可能性を探っていく国土交通省の宮古島市モデル地区検討会が三十一日、発足した。観光や医療関係者らで構成され、健康長寿観光のニーズや素材、推進戦略などを調査検討し、来年一月にはモニターツアーを実施する。座長に

は沖縄観光コンベンションビューローの洲鎌孝専務理事が選ばれた。

同事業は地域が持つ多様な自然環境、特徴的な風土と景観、伝統文化な

どを資源として健康長寿社会づくりに役立つ地域滞在型観光の新分野開拓などを目的に宮古島市を

含む全国五カ所で実施される。健康長寿社会に対応した新しい観光のあり方、都市住民のニーズ、宮古島市が持つ資源や特徴などを検討する。

来年一月末に実施予定のモニターツアーでは農業や黒糖づくり、三味線の体験、文化財めぐり、郷土料理、民泊などの案が出されている。他モデル地区では北海道十勝町が花粉対策ツアー、新

これに関連して多良間村議会（西平幹議長）は六日にも臨時会を開き、同様に意見書を採用する見通し。また、石垣、竹富、与那国の八重山三市町議会も臨時会を開く。要請行動は宮古、八重山の五市町村議会が合同で展開する予定。



健康長寿観光に向けて意見を交わす検討委員。市役所上野庁舎会議室

潟県長岡市が伝統的な山村地域の生活、長野県木島平村が森林セラピーを行っている。

委員からは「沖縄はメタボリックシンドローム率が高く、かつての健康長寿の食生活からの変化をどう捉えるか。バイオ燃料など循環型社会の取り組みも取り入れられないか」「最近あまり食べられなくなったパパイヤの幹など昔の食材を生かしては」「宮古の野草はほとんど食べられるので活用したい」などの意見が出されていた。

座長に選ばれた洲鎌孝専務理事は「まだ周遊観光が七〇％を占めており、新たな開発が大きな課題。この調査が素晴らしい成果を挙げられるよう皆さんの協力をお願いしたい」と述べた。

委員は次の通り。
座長 洲鎌孝 沖縄観光コンベンションビューロー 専務理事▽委員 藤村明

霊宮古観光協会長、松原敬子 グリーンツーリズムさるかの会事務局長、竹井太 医療法人たぶの理事長、新里盛繁 宮古島市老人クラブ連合会長▽オプザーバー 平野貴大 東京都高齢者研究・福祉振興財団客員研究員

地域滞在型
観光等推進

体験・交流を展開

初のモニターツアー開始

関東中心に
20人來島
市がモデルづくりで



二〇二〇年度「健康長寿社会の実現に向けた地域滞在型観光等の推進方策に関する調査」のモデル地区となっている宮古島市のモニターツアーが二十日、はじまった。関東を中心にツアー客とスタッフら二十人が宮古入りし、二十三日までの期間、農作業や三昧線、陶芸などの体験や文化財巡り、地元との交流に挑む。事業主体の同市「伊志嶺市長」は、ツアーを通して「健康・長寿社会」を目指した地域滞在型の新たな観光分野の開始を促進するため、モニターアンケートなどを踏まえ、今後のプログラム開発に生かす方針だ。

調査は、国土交通・厚生労働省が中心となって実施しているもので、モデル地区は宮古島をはじめ北海道十勝町、新潟県長岡市、長野県木下町、広島県三原市の全国五地区。

事業は、健康・生きがい・趣味への充溢（あふ）をテーマとし、地域が持つ自然環境や特長的な風土・慣習（伝統的な文化）、自然と共生する暮らしなどを迎へ、健康長寿社会の実現に向け新たな観光分野の創出を目指す。

モニター調査で宮古入りした一行ら「宮古島港ロビー」

宮古島は昨年十月にモデル地区検討会（座長・

洲藤洋輔観光コンベンションビューロー常務）を設置し、友好都市の東京都世田谷区、都老人総合研究所、地元NPOとの連携し、認知症予防のための旅行プログラムの開発・促進とともに、地域特有の資源や資源、文化を活用した滞在型の健康長寿観光プログラムの開発を推進する取り組みを展開している。

二十三日過ぎ、那覇から宮古入りした一行の歓迎式が宮古港ロビーで行われ、伊志嶺市長は、「今回のツアーは体験型観光を体験するもの。農作業や三昧線や貝細工、陶芸、郷土料理づくりの体験、さらには地下ダム資料館、土居遺跡、米間島、博物館などの見学に臨む。また、それぞれがコースを設定した観光などを行う予定。」

総合研究所の平野真大研究員は、「交流を通して、観光の認知症予防に向けて、何回か実施していきたい」との言葉を示した。また、世田谷認知症予防活動交流会事務局の沖眞一さん（76）は、「ツアーで互いの心のつながりあいを活用し、滞在型の健康長寿観光を持っていると。また、これを機会に沖縄本島と宮古の違いを確かめたい」と語った。

参加者は二十三日までの期間中、民宿や農家宅に宿泊し、農作業をはじめ三昧線や貝細工、陶芸、郷土料理づくりの体験、さらには地下ダム資料館、土居遺跡、米間島、博物館などの見学に臨む。また、それぞれがコースを設定した観光などを行う予定。